

下村町池窯跡

1974.3  
豊中市教育委員会

## はじめに

大阪の北部、豊中市の地理的な環境は、北東部の千里山丘陵部と、それに接する中央部の台地、その西南部の低湿地の3地域に大別することができる。かつて、これらの地域はそれぞれの特徴を有した農村地帯としての景観を呈していたのであるが、その中に、先人たちの生活の跡を豊富に秘めた、いわゆる埋蔵文化財包蔵地を含んでいることは、案外に知られていない。

西南部猪名川流域には、勝部遺跡を代表とする弥生時代以後の集落遺跡があり、中央部には古墳時代中期の桜塚古墳群が築かれている。また、待兼山や島熊山などかつての名勝と詠われた山々を含む千里山丘陵一帯には、製陶遺跡群がある。これらは、桜井谷窯跡群と呼んでいるもので、堺市の旧陶器村を中心とする日本最古の製陶遺跡群に次ぐ存在として、当市における数多くの遺跡の中でも見逃すことのできないものである。

しかしながら、住宅地としての開発化がとみに著しい当市においては、この地域も決して例外ではなく、近年大幅にその数を減じつつあることは、市域の文化財を保存する立場からは、極めて憂慮すべきことといわなければならない。特に、周知のように、昭和45年の千里丘陵（吹田市域）における万国博覧会の開催は、当然のこととして、周辺地域における道路交通網の整備を目的とする大規模な土木建設工事を促すことになった。本報告書の対象である下村町池窯跡は、こうした一連の工事のうち、当市の北部を東西に大きく貫通する中央環状線・中国縦貫道路の予定地に位置していたために発掘調査を行なったものである。

既に述べたように、その規模においても内容においても学術上貴重な価値を持ち、また古くからその存在が注目されていたにもかかわらず、これまで本格的な分布調査ないしは、範囲確認のための調査が行なわれていないこともあって、当窯跡群に言及した文献は二三、散見されるのみであり、資料も極めて乏しいことは誠に残念なことと言わねばならない。

本報告の刊行がこうした渴を多少とも解消することとなり、当窯跡群の全貌を解明するための一助ともなれば、私たちにとって望外の幸運である。

あとになりましたが、本調査の実施のため、終始ご協力いただいた関係各位に対し、深甚の謝意を表し、刊行のことばとします。

昭和49年3月

豊中市教育委員会

教育長 北原富男

## 目 次

1. 発掘調査の経過	1
2. 窯跡の位置と立地	2
3. 構 造	4
4. 出土遺物	7
5. 構築法	10
6. 考 察	11
7. 熱残留磁気測定結果	13

## 図 版 目 次

図版 1 造構実測図	図版 6 天井残存部の状態
図版 2 出土遺物実測図	図版 7 壁の重層・断面天井落下状態
図版 3 出土遺物実測図	図版 8 遺物出土状態
図版 4 遠景・大井残存部	図版 9 発見時・工事着工前の状態
図版 5 奥壁の状態	図版 10 出土遺物

## 例 言

1. 本報告は、下村町池窯跡発掘調査團が日本道路公団及び豊中市の委託を受けて実施した下村町池窯跡の発掘調査によるものである。
2. 本調査は、大阪教育大学助教授鳥越憲三郎を団長とし、調査員として日本考古学协会会员藤井直正と島田義明があたった。調査補助員には原田修・久貝健・奥井哲秀・村上敏明・兵藤佐久・北野保等があたり、その他多数の学生諸君の協力を得た。
3. 本調査の進行にあたって、豊中市文化財保護委員・帝塚山大学講師藤澤一夫氏に指導助言いただいた。
4. 出土遺物の整理作業と本報告の執筆作成については、島田義明・森川好子・厚美正子があたり、団長鳥越憲三郎・調査員藤井直正が監修をした。
5. 熱残留磁気測定について、大阪大学基礎工学部広岡公夫氏に資料採取を頼い、のち結果をいただいた。

## 1. 発掘調査の経過

昭和43年、千里丘陵を横断して大阪中央環状線及び中国縦貫自動車道の敷設工事が実施されたが、大阪府教育委員会の分布調査により、この予定地内の下村町池北西岸に窯体を露出した窯跡の存在が確認された。このことにより、豊中市教育委員会では数回の現地調査を行ない、調査団の結成など、発掘調査の準備を進めた。

発掘調査は昭和43年11月18日から同12月9日までと、昭和44年1月4日から同2月16日までの2回に分けて実施した。

第1回の調査は窯跡発見時に確認された窯体を中心として樹木の伐採及び上部堆積土の除去からはじめたが、5日目には奥壁部と思われる酸化色の弧状輪郭を発掘した。その後の調査により奥壁は3重の構造をもっていることがわかり、この輪郭は第2次の窯のものであることが判明した。露出していた窯体部焚口付近からも同時に調査を進めていたが、燃焼部近くに天井の残っていることがわかり、この上部土層を確認した結果、この窯が堀りぬきの登り窯であることがわかつてきただ。焚口付近の床面は、池の水位との関係から湧水が激しくなり、調査続行が困難なため水位低下交渉の結果を待つこととした。

第2回の調査は、池の水位を低くした1月4日から開始し、焚口の前面の構造及び灰原の調査を目的として実施した。その結果は、焚口付近に舟底状のピットを検出したが、それより前面は池の開き時に埋りこまれていることが判明した。また灰原についても確認につとめたが、1m余も堆積したヘドロのため調査を断念した。

調査は2月16日までに各個所の実測・測量・及び資料採取等を行なって終了した。

調査中、豊中市文化財保護委員藤澤一夫氏に指導助言いただき、大阪大学基礎工学部広岡公夫氏には熱残留磁気測定についての資料採取を願い、後、その結果をご教示いただいた。また、豊中新聞社杉郷房雄氏宅にて宿舎の提供を受け、下村町池管理者阪本光造氏には池の水位についてお世話をいただいた。ここに記して謝意を表する。



第1回 発見時の状態

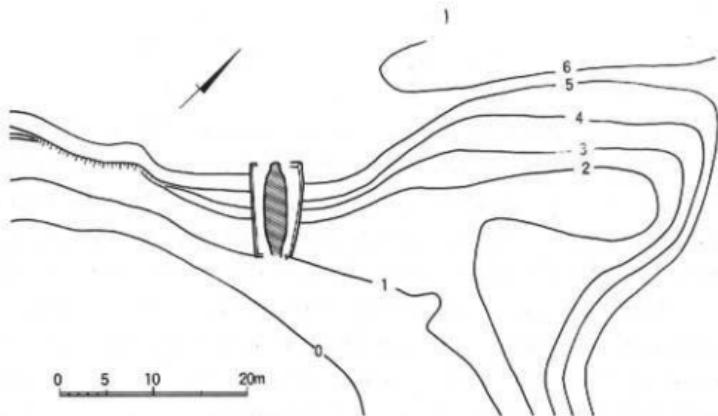
## 2. 窯跡の位置と立地

豊中市の北部、千里丘陵の西側を箕面市から貢流する千里川は、幅約500m、長さ約5kmにわたって桜井谷を形成している。この桜井谷の東岸、西岸には多くの窯跡があり、古くから桜井谷窯跡群と呼ばれてきた。これらの窯跡は、主谷桜井谷の斜面には見い出す事はできないが、これに落ち込む多くの支谷斜面に築かれている。

下村町池窯跡は豊中市少路にあり、桜井谷に落ち込む支谷村町谷の末端部を堰きとめた下村町池の北西斜面にある。この窯跡は桜井谷窯群でも最も南に位置し、これより北には羽庭下池・上池・梨谷下池・上池や新池と桜井谷添いに多くの池が点在している。桜井谷窯跡群は現在までに20個所近くの土器散布地が確認されていたが、これらの多くは池の近くに存在していたらしい。このほか豊中市域では桜井谷窯跡群の南の青池周辺の窯跡<sup>(1)</sup>



第2図 窯跡付近の地形



第3図 窯跡地形測量図

群や東側の能野田窯跡群が確認されており、さらに東側、吹田市においても39個所位の窯跡が確認されていることから、千里丘陵にも泉北陶邑窯跡群には及ばないにしても、相当数の窯が築かれていたものと考えられる。

現在、池は水位が非常に高く、焚口のすべてを水没させている。下村町谷では、下村町池の上に隣接して上村町池がみられるが、明治20年の地形図では上村町池があるのみである。この事から下町村池の谷を堰き止めるための堤は明治の頃に構築されたもので、それ以前は谷を利用した水田であったとすることができ、下村町池の現状は古墳時代まで溯り得る古いものではないことがわかる。

桜井谷の東岸はこれに落ちこむ多くの支谷を除いては、比較的平坦な丘陵面が続いている。この多く所で現在樹木あるいは鑑賞用の植物が栽培されている。

桜井谷を構成する落ち込みは、平均して標高50mの高さで続いているが、それより上は平坦な面が続いている。この面の耕土を30cm余り掘りおこすと黄褐色の礫層があるが、良くしまっており、少し粘土分も含んでいる。この層は窯の所在地点にも認められ、2.3m続いて褐色から黄褐色・黄白色としだいに色が薄くなる砂質粘土層に変わる。窯はこの層を中心として構築されたらしく、床面はこの層の厚み3.4mを十分利用し完全にこの範囲に納めている。それより下は燃焼部舟底状のピットに少し顔を出す青灰色砂層が続いている。これらの地層は池壁面の観察でほとんど水平に分布しており、窯の構築に際しては、この問題を十分理解していたようである。

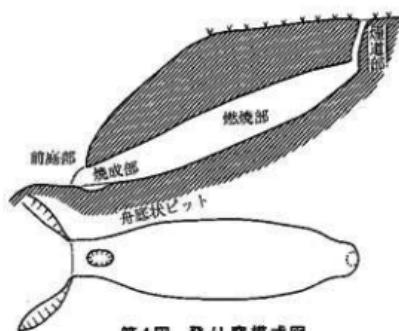
### 3. 構造

下村町池窯跡は、豊中市小路下村町池の北西岸にあり、N-47°Wを主軸として構築された登り窯である。構造は調査の結果複雑な様相を呈したものであり、同一主軸をもつ窯が3基重なったという特異な形態のものであった。このような例は泉北陶邑窯跡群光明池13号窯にも見られるが、下村町池、窯跡では光明池の例の様に一度放棄した所に再び窯を構築したという觀はなく、構造上、終始同じ窯を修理・改築して使用したものと考えられる。三重の窯は古いものより、第1次窯・第2次窯・第3次窯としたが、時代が降るにつれて窯は奥壁を前方に移動させており、煙道部はすべてを改築しながら使用したものである。床面も各々の窯で別のものであり、第2次窯の床面は第1次窯床面の上をそのまま使用しており、第3次窯床面は第2次窯で高くなったものを掘り込んで使用していた。この掘り込みは第1次窯床面にも及んでおり、このため第1次窯床面を検出した際、第3次窯奥壁の弧形が切り込んだ形で検出された。

窯燃烧部焚口で舟底ピットを検出したが、その前面は後世に切断されており、前庭部までの検出は出来なかった。しかし窯体は、ほぼ完全に残っており、調査によってその規模を確認することができた。

下村町池窯跡が構築されている地山層は、登り窯を構築する条件として悪く、上部が礫層であり、窯のベースとなるべき黄褐色砂質粘土層の厚さは3.4mしかない。このため窯構築においては、焚口床面から煙道部床面の比高を3.3mとして、この層をすべて床面に使用している。燃烧部から焼成部のほとんどは

床面も側壁・天井もベース内に構築できるが、それより上部の側壁・天井や煙道部は礫層に喰いこむ。すなわち煙道部はすべて礫層内に構築されている。煙道部の構造は明らかでないが、第1次窯煙道部背面においては、礫層に壁上を貼付けする事なく、じかに利用している。このために煙道背面の礫は還元しており、その裏には15cm余の赤色に酸化した礫層も認められた。煙道の



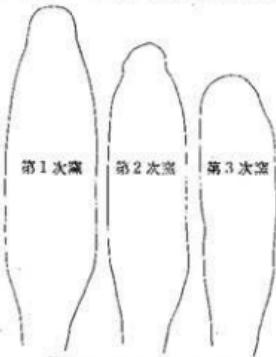
第4図 登り窯模式図

側面にはこれと異なって壁上が貼付されている。これは二次的に煙道前面を構築する際に貼付されたものと考えられ、背面の半円は地山礫層で、前面は粘土貼付によって径90cmの円形につくっていたものである。第2次の窯は第3次窯によって切りこまれているために、主として煙道部のみが検出された。煙道部といつても煙道下の床面1m余りと奥壁の下部のみで、第1次窯奥壁よりは80cm(水平距離)前へ移動していた。床面は第1次窯の床面の上に堆積した土をそのまま利用していたが、奥壁裏や側面には土器・石・粘土や壁の塊等をつめこんで構築されている。煙道上部はほとんど崩壊していたが、奥壁に続く酸化層がわずかに残っており、これによって第2次窯の煙道は第1次窯の煙道上端を越えて斜め上へ長く構築している事がわかった。

第3次窯の奥壁は第1次窯奥壁より1.8m・第2次窯奥壁より1m前進させていた。奥壁下端は第2次窯床面を切りこんでその部分に壁土を貼付して利用していたが、その上部の煙道のすべては粘土等により構築したものであったと思われる。このためか煙道部の崩壊は激しく、その形状は究明する事ができなかった。しかし側壁の酸化層が奥壁近くで厚くなり上へ伸びていた事から、第2次窯の煙道部とは関係なく垂直に構築されていたと考えられる。

**焼成部** 側壁や現存していた天井部は、多くスサ入り粘土を使用しており、貼付けの場合手で行なったと思われ、指を擦りつけた痕が何箇所も見受けられた。壁は厚い所では30cmを計り、多い所では4枚位に分離する。しかし全体的には平均して3枚を数える事ができ、窯は改築を重ねるごとに壁を貼り替えていたと思われる。また側壁がずり落ちたままや、所によって壁が剥離して空間の残ったまま次の壁が貼付されている箇所も見られた。その他補修のために貼付けされたと思える箇所も多い。

焼成部の上部は、奥壁の移動に見られるように何回となく天井の落下や側壁の剥離があったと見え、構造的にも複雑であるが、焼成部の下部は現存した天井部が示すように比較的安定して用いられたと思われる。また焼成部の上半は、特に右側壁の剥離や崩壊部分が大きく、第3次窯の中心軸が第1次窯の中心軸より15cm左へ移動しているという現象がみら



第5図 各次窯の規模

れる。床面傾斜角度は第1次窯の上端付近で25°を計り、第3次窯でも焼成部のほとんどが25°で、燃焼部に近づくにつれて15°近くになり、焚口付近ではほとんど水平になる。第1次窯・第2次窯とも床面の傾斜角度は第3次窯に準じたものであったと考えられる。焼成部は第1次窯の広い部分で、2.5m・第2次では2.2m・第3次では2.1mを計ることができる。断面形を観察すると、幅が広いためか扁平なドーム状を呈しており、天井部は1.2~1.3m余りであったと考えられる。また壁の貼付け方法は第1段階で側壁を垂直または若干外傾させて50cm位の高さに貼り、次に天井部となる壁を貼りつけていた。このため、その縫ぎ目は急に角度が変換しており、天井部の崩壊もほとんどこの場所から起っている。

**燃 燃 部** 焼成部と燃焼部の境あたりには天井部が現存している。この付近の床面は傾斜15°をはかり、焚口に近づくにつれて水平になっている。またその幅は2m前後から焚口では1m位にすばまっている。燃焼部の壁は焼成部の壁のように外傾する事なく床から内傾してドームを形成しており、表面は淡緑色の釉を吹き出していた。還元層は焼けてしまって、コンクリート状になり、30cm位の厚さであり、全体的には3枚位にはがれるようである。しかし焚口付近は壁が1枚であり、奥壁の移動によって焚口を移動したとは見られず、終始同じ所を使用したと考えられる。焚口に黒色灰の詰まった直徑1.2m深さ20cmの舟底状ピットを検出した。しかし地山の掘り方はもっと大きく、水平に近い部分は深さ20cm~40cmに削りくぼめられており、その中の土は地山の土に少し炭がまじっている程度で、すべて灰がつまっている状態ではない。この状態から一般に指摘されているように、この舟底状ピットは直接燃焼に關係がなく、燃焼部は天井残存部付近とえられる。

**溝 状 造 構** 窯の上面には丘陵面を堀り込んで造り出した平坦面がある。この溝状構造の窯の左側に幅60cm・深さ80~120cmの溝状の造構が検出された。溝状造構は第1次窯の焼成部が煙道部へくびれるあたりの側壁脛から、窯主軸とはほぼ直角方向に進み、カーブをもって斜面に向かっている。造構の底部は上部側壁を堀りぬき、黄褐色砂質粘土層に達しており、斜面方向に低くなっているので、排水溝とも考えられる。内部に堆積したまったく礫を含まない明褐色土の中には炭や焼土が多く混入しており、側面の地山礫が何個所かで焼けている事が確認された。この造構が窯と関係するのは、その高さから当然天井部であるが、この付近は第2次窯・第3次窯による改築の多い所で明確な関係は得られなかった。ただ第2次窯の側壁との関係からして窯内部との連絡がないものである事は判明している。いずれにしてもこの造構の目的は排水構であったと考えられるが、堆積している灰や焼けた土は何に原因するものか不明である。

#### 4. 出土遺物

下村町池窯跡は池の斜面にあり、窯の前方は泥が1m余り堆積した池の底となるために灰原の調査を行なうことができなかった。遺物はすべて窯体発掘時に出土したもので、その量は少ないし、ほとんどが破片であった。

第1次窯の遺物は、第3次窯に切り込まれるまでの床面1.8mの範囲で出土した。この床面の上に構築された第2次奥壁を取り除くと第1次床面の上に多くの土器が乗っていた。これらのうち、大型器形の破片は一面にあり、小型の器形のものでは杯身の完形品1個であとはすべて破片であった。第1次床面は大きく3層に分けられた全体の厚さは30cmであった。第1次窯の最終面とその下の2枚目の層には大型器形の破片が相当出土しているが、3枚目の最下層では遺物は少なかった。

第2次窯は床面が奥壁より80cm検出されただけで、遺物は乗っていなかった。ただ第3次奥壁を構築する際につめこんだと思われる中型の器形の破片が出土している。

第3次窯は下村町池窯において最終の窯で、床面も大部分はこの窯に伴なうものであった。しかし床面の焼き上った上器はきれいに取り出されていた。取り上げた遺物はこれらの残ったもので、すべて破片となって、壁の隅のものが多かった。特異な出土状態をして、現存した犬井下の左右の壁にそってバケツ一杯分位の壺の破片が山積みに整理された状態で出土したことである。(図版8)

第1次窯と第3次窯の遺物については、床面より出土した土器で、年代を押さえる事ができる。第2次窯については、床面に伴った遺物がないが、奥壁・煙道部・犬井部の構築に詰込まれたと思える遺物の中に、第1次・第3次窯に伴わない土器が相当ある。これらの土器は、第1次と第3次窯の間の時期にあてはめる事ができるので、これらを第2次窯の遺物として比定できると考えられる。

現在整理を済ませた段階で各次窯の年代を大観すると、第1次窯の遺物は、陶邑古窯址群Ⅰの編年でⅠ期後半に比定できる。第3次窯は、宝珠つまみと高台が出土しており、Ⅲ期前半に比定できる。この間を埋める土器は、第2次窯に作ると思われる犬井崩壊部から出土した遺物中にⅡ期に比定しうる遺物が多い。

このように、下村町池窯の年代は、陶邑古窯址群の編年と比較すると、Ⅰ期後半からⅢ期前半まで続き、年代的には5世紀の終りから7世紀の初めまで続いた窯であり、この期間内で3回にわたって使用された窯とする事ができる。

# 出土遺物一覧表

## 第1次窯に伴う遺物(図版2)

番号	器形の特徴	盤形の特徴	備考
1 环 身	口縁部立ちあがりは、やや内傾し高さは2cmに達する。端部は内側へ浅く凹みをなす。	ヘラ削り明瞭、端部整形良好	焼成良好、青灰色を呈す。
	2 受部は外上方へのび、2段になる。	ヘラ削り5~6周回らす。	
	3 口縁部立ちあがり端面は内傾し鈍い。受部は丸い。	ヘラ削り不明瞭	焼成良好、灰褐色を呈す。
	4 口縁部立ちあがりの内傾度はやや大きい。受部は外上方へのび、先端は鋭い。		重ね焼きをしており、上に塵の破片が付着。
5 环 身 足 蓋	5 天井部と口縁部の境界は突出して鋭い棱をなす。口縁部端面は深い段状をなす。	ヘラ削り5~6周回らす 内面及び体部に横ナメ	焼成良好、乳白色を呈す。
	6 天井部は高く全体的につくりは丸い。		焼成良好、黒いつやをもつ
	7 天井部と口縁部を分ける棱線及び口縁部は鋭い。	ヘラ削り不明瞭	胎土は砂粒を多く含む 体部に輪付着。
	8 角のつくりはしっかりしており、体部は湾い	ヘラ削り5~6周回らす。	焼成良好、灰褐色を呈す。
	9 天井部と体部の境界の棱はヘラ削りの後に造り出している。	器表全面ヘラ削り、内面横ナメ	焼成良好、暗灰褐色を呈す。
	10 角のつくりは丸い。口縁部はやや外反する。	ヘラ削りは荒く3~4周回らす。	胎土は砂粒を多く含む。 焼成良好、灰褐色を呈す。
	11 下を明瞭な棱線で区分した文様帶があり細引き波状文を施す。この文様帯は1個の脚りつまみがなく無蓋高杯であろう。	文様帯の上方は横ナメ、下方はヘラ削り。	焼成良好、黒褐色のつやをもつ
	12 口縁部と底盤の境界に段がつく。	内面横ナメ	焼成良好、灰褐色を呈す。
	13 脚部に円孔を穿つ、端部は上方に肥厚。	脚部はヘラ削り、内面横ナメ。	
	14 端部はやや内寄する。3方に向く出しをもつ	脚部中央に刷毛目	焼成やや軟調。
15 腹	15 口縁部は上端が立ちあがり、下端は少し下へ下る。	脚部に刷毛目、他は横ナメ。	焼成良好、黒褐色を呈す。
	16 口縁直下に断面二角形の丸みをもつた凸部をもつ。	体部全面にタタキ目の上から刷毛目	焼成不良。
	17 端部に段状の内傾斜面を有し、内面との間に明瞭な棱線が認められる。		焼成時に砂が多く付着濃緑色の自然釉がかかっている。
	18 回旋と波状文を施している。	全面横ナメ。	焼成良好、灰褐色を呈す。 胎土のきめは荒い。
19 脚	19 壁面に立つ口縁をもち、体部中央に釋插孔判 直文が刻る。つくりは薄い。	内面横ナメ。	灰褐色を呈す。
	20 天井部中央につまみがつく、つまみは中央が凹むもので器底に比して大きい。	器表はヘラ削り、内面横ナメ。	
	21 脚の高いつまみがつく。	体部器表に交差する平行タタキ目 内面、同心円文	
	22 端部は下らで内方へ肥厚する。		焼成不良。

## 第2次窯に伴う遺物(図版2)

番号	器形の特徴	盤形の特徴	備考
23 腰	口縁部は下方に肥厚。	端部に横ナメ	焼成良好、青灰色を呈す。
	口縁部は下に肥厚、端部直下に断面三角形の内面をもつ。	体部に平行タタキ目を施した後、刷毛目調整、脚部の另行に平行タタキ目 が見られるがその後の刷毛目により不明瞭。	灰褐色を呈す。

### 第3次窓に伴う遺物(図版3)

器 形 名	器 形 の 特 徴	整 形 の 特 徴	備 考
杯 身	立ちあがりは内傾し、非常に低い。小型化が著しく底部中央がやや失っている。	内面 横ナデ	青灰色と赤茶色のサンドイッチ状に焼成。つくりは粗陋
	全体と口縁部は外上方へ直線的にのび、腹部は丸くおきめている。		
杯 蓋	天井部中央にやや扁平な宝珠形つまみがつく。口縁部にちかく、内面にかえりをもつが、かえりは口縁部よりも下方へ突出している。	天井部のヘラ削りは丸い	胎土に砂粒を多く含む。低温で焼かれたため灰白色を呈している。
	天井部と口縁部の境界は段をなす。天井頂部にやや扁平な宝珠形つまみがつく。	ヘラ削りは浅く、天井部にヘラによるしるしが認められる。	
寸 り 鉢	4方に円孔を穿つ貼付け高台		焼成良好
	貼付け高台、高台はあまり高くなく外方へふんばる。	貼付けの後ヘラ削り	
寸 り 鉢	厚い円盤状の底部をもつ。全体は外上方へ直線的にのびるものと思われる。	器表はナデによる調整	焼成不良、黄灰色を呈す
	陶椎脚部		焼成良好

### その他の遺物(図版3)

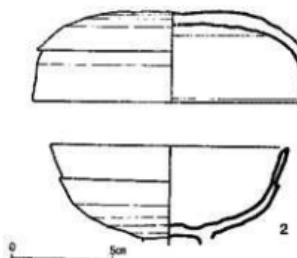
器 形 名	器 形 の 特 徴	整 形 の 特 徴	備 考
杯 身	立ちあがりは内傾して直線的に立つ。受部は外上方にのびる。	底部にヘラ削り	灰色を呈し、傳子のよい土器である。
	立ちあがり端面はやや肥厚し、丸くおきめられる。受部は水平にのびる。		胎土はやや粗雑、焼成良好でつやをもつ
	33、34に比して立ちあがりは低い。		胎土は砂粒を多く含む。焼成良好、墨褐色を呈す
杯 蓋	天井部と口縁部を分ける稜筋はほとんど外方へ突出しない。全体に丸い。	ヘラ削り4~5周回らす。内面横ナデ	灰白色を呈し、つくりは粗雑
	天井部と縁部は浅い不明瞭な凹輪によって分けられる。	底部に逆時計まわりにヘラ削り。全体と内面に横ナデ	焼成は良好であるが、天井部と内面の焼成状態が異なり、全体が黒いので墨わ焼きをしたものと思われる。
蓋	天井部と口縁部を分ける稜筋は消滅		胎土は砂粒を多く含む
	口縁端部は強く外反し、上下に肥厚	体部に刷毛目、その上に平行タタキ目を施し体部内面の同心円文を消している。	焼成良好、青灰色を呈す
蓋	口縁部は外反し、端部は下方に肥厚	口縁部刷毛目、内面タタキ目	
	口縁端部は上下に肥厚、質部の張りが大きい	外面タタキ目	焼成良好
高 杯	口縁底下に断面三角形の凸唇、腹部に2条の凹輪を割りし模様を波状文を3段施す。		
	L縁前と底部の境界に1条の凹輪を施らし、脚部に細長い透しを1段3方に穿つ。		
高 杯	2条の凹輪をはさんで、長方形の3方に開く透しを2段穿つ。脚部は上下に肥厚。	内面 横ナデ	焼成良好
	脚部内面は極度くしづり、脚部は外方へ大きく広がる。脚部中央の2条の凹輪をはさんで3方に開く透しを2段交差する脚部端面は明らかにつくっている。		焼成良好、青灰色を呈す
器 合 台	口縁部は水平に折れ曲り、口縁底下に断面三角形の凸唇と模様を波状文を施す。	内面 横ナデ	

## 5. 構 築 法

第2次窯・第3次窯は、燃焼部・焼成部のほとんどが第1次窯と重なって存在するもので、基本的には第1次窯の修理によって出来た窯である。この際に、煙道部のみは大幅に改築され、奥壁が移動している。

発掘を開始して間もなく、窯体中心軸の左右上面に平坦な面のある事が確認された。これは、地山礫層を1.2~1.4m位垂直に下げたもので、第1次窯の煙道から前方へ4m位を平坦に造り出したものである。この場所の中心軸から左に構造の付属造構とした溝状の遺構がある。この遺構からは第1次窯に比定しうる遺物が出土しており、当初からの排水施設であると考えられる。

窯の構築に際して、第1段階として平坦面が造り出されている。窯体は次の段階として構築されたもので、現存した天井部を検討した結果、犬井部の土が地山と連続している事から、堀りぬき式（地下式）の窯であることが判明した。しかし、地山を利用した天井部が焚口から煙道部まで続いているかどうかは、第2次窯・第3次窯の改築あるいは後の崩壊などで確認することはできなかった。発掘結果から考え合わせると、焚口より焼成部のほとんどは大井となる部分の地山が現存した天井と同じ黄褐色砂質粘土層であるため、焼成によっては堅固なものになるという事からも堀りぬき式のものであったと考えられる。しかし、これより上部煙道部までは、地山の条件が悪く礫層になるため、この部分は自然土層に依存する事なく人为的に構築したものと考えられる。この事は煙道部の観察からも窺うことができる。第1次窯の煙道部及び奥壁や焼成部上端の側壁は礫層を掘った部分である。このうち煙道部背面のみは地山礫層をじかに利用しているが、煙道部侧面及び焼成部上端の側壁には壁土が貼りつけられている。この壁土がおそらく煙道部前面及び焼成部上端の犬井へ続くもので人為的な構築部分との繋ぎ目であろうと考えられる。また別の観点から見ると、発掘中、天井部の崩壊による還元層や酸化層の塊に達するまでに、型式の異なった土器・生焼けの土器・床面層に同着した土器あるいは窯壁塊等が出土した。これらは遺構の擾乱によるものか、窯とは直接関係のない上部の遺構から流れこんだもの



第6図 溝状造構遺物

ではないかと考えられたが、発掘の結果は第3次窯使用以後は焚口前面を除いては搅乱を受けておらず、また上部にも造構が認められなかった。以上の様な結果からこれらの土器等は第2次窯・第3次窯の煙道部の構築に使用されたものと考えられる。すなわち、これらの土器等は、第1次窯において構築された煙道部が地山と異なって崩壊しやすく、そこを第2次窯・第3次窯で修理・改築された折に埋めこまれたものと考えられる。

下村町池窯跡の窯体の下半部は地山を利用して掘りぬいたもので、上半部は上からの掘りこみによって構築されたもので、地下式と半地下式の構造をもつたものと考えられる。このような構築法は、その場所の地形・地層との関係から選ばれた方法で、第1段階として行なられた平坦面の造り出しも上部礫層の排除の目的をもつものであろう。

## 6. 考 察

下村町池窯跡は、前述したように窯の構造あるいは出土遺物の考察からⅠ期後半からⅢ期前半まで断続して使用された窯である。この窯がかなりの長期間使用されたという事で重視しなくてはならないのは、窯が構築法等によって長期間の使用に耐え得るものであったという事であろう。泉北陶凹古窯跡群では、一般的な窯の構築法として、半地下式の構造が上げられているが、桜井谷窯跡群では一般的な構築法が指摘できないとしても、下村町池窯跡では掘りぬきの地下式構造が採用されていた。この構築法が採用されていたのは地山斜面が40°という急斜面であり、窯体を構築しようとする黄褐色砂質粘土層の厚さが3.3~3.4mしかなく、その上には2.3mの礫層があるという条件によって必然的に採用されたものである。すなわち、この地形において半地下式構造で窯を構築しようとすれば、上面から最低2.3m、最高4mの礫層及び粘土層を掘りこまねばならない。

普通、窯は、2基あるいは3基と並列して構築されたり、点々と移動する例が多いが、この窯においては窯の耐久性がすぐれしており、1基の窯で3基の窯の働きをしたという点で注目される。この点において注目をしたならば、窯が並列して構築される要因として窯を維持して行くための薪あるいはその他の原料に求めることもできるが、窯の耐久性も考慮される必要があろう。

出土遺物の考察によると、本窯跡は単一時期のものではなく、それらは窯の構造と同じく3時期のものを含んでいる。これらの資料から推定される年代は、桜井谷で須恵器の生産の始められる5世紀の後半から、ほぼ生産の途絶える7世紀の前半と考えられる。すなわち第1次窯が5世紀終末、第3次窯が7世紀初頭と考えられる。窯体そのものは、大井

部が残存していた事などから、多少の修理を行ないさえすれば十分使用に耐えるものであったと考えられるが、この間を埋め尽くすに足る資料は得られなかった。この事から下村町池窯跡は、長い存続期間内において短期間の使用が行なわれたものと考えられる。このように出土遺物において時期差を考えさせる窯としては、本窯跡の南東に上野青池南畔窯跡がある。

<sup>(15)</sup> 土器の生産においては、窯を構築し得る地形的な条件と原料及び膨大な量を消耗する燃料の問題がある。本窯の場合は地理的な条件としての地形及び原料等の問題は解消できるが、長い期間窯を維持するための燃料の問題が残る。今、仮に第1次窯が構築されてから第3次窯の使用が終るまでを100年とし、この間に第1次・第2次窯・第3次窯の短期間の使用が行なわれたとすると、

$$\frac{100 - 3X}{2} = 50 - \frac{3}{2}X \quad (\text{但し } X = \text{単次使用年数})$$

という式によって各次窯の間の年数を得る事ができる。この数値については、土器型式による絶対年代の把握や、単次窯の使用年数がどの位であるかによって大きく変動するが、概ね数十年の間各次窯の間に空白期間を認めることができる。単純な解釈であるが、この数値を重視し、燃料の問題と寄れるならば、すなわち燃料とする植物相の復原のために必要な期間を考えることができる。

窯跡の遺存状態については、单一に一基のみが残る場合や、同一地点で異時期の窯の残る場合、また同一地点ではほぼ同時期の窯が併存する場合などが考えられる。このうち、同一地点でほぼ同時期のものが併存する場合は窯体の耐久性の問題として、その他の場合は燃料となるべき薪の問題としてとらえることができる。このように土器生産は、まず原料に、そして地形に、また燃料となる植物相にと、全く自然に依存した形で営まれており、ここにその限界をうかがうことができる。

下村町池窯は、第3次窯の使用後、とだえて窯跡となっている。しかし、この最後は天井の落石等で崩壊したのではない。焼き上がりの土器は完全に窯出しを行ない、さらに散らばっていたであろう甕等の破片は焼成部下端の左右に集め積まれていた。おそらく窯はまだ使用に耐え得る状態であったと考えられる。第3次窯の使用が終るころ、桜井谷ではほぼ須恵器の生産が終ろうとしている。しかし、今は廢寺となった金寺の瓦が桜井谷窯跡群中で発見されており、須恵器の工人たちは、土器生産の技術を生かして瓦工人に転換し、細々と命脈を保っていたと考えられる。このころ、各地方での須恵器生産が活発となり、さらに良質の原料等立地に恵まれた地域へ生産の中心は移っていったのであろう。

## 7. 热残留磁気測定結果

今回の調査において、大阪大学基礎工学部広岡公夫氏により热残留磁気の測定が行なわれ、その推定年代について結果をいただいた。

資料採取

昭和43年12月7日

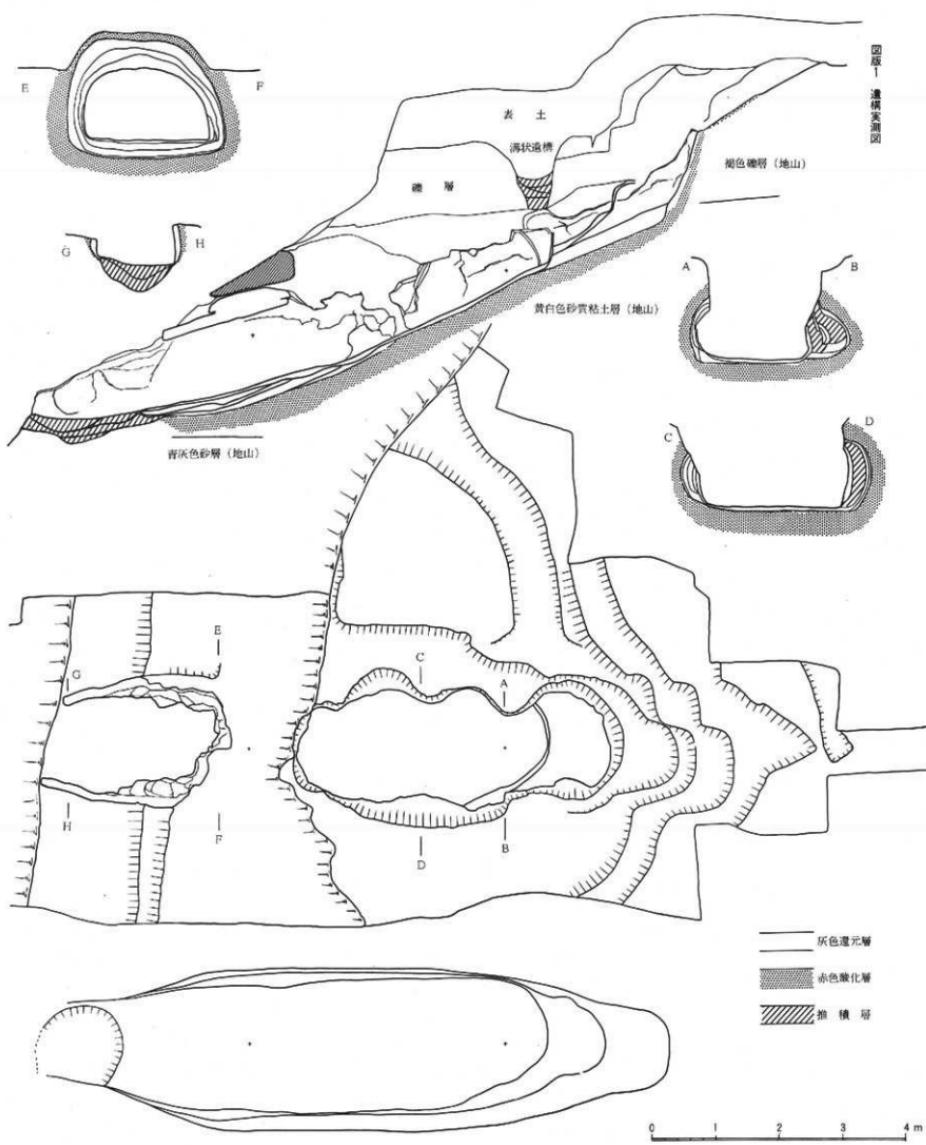
採取地点	偏角	伏角	誤差	試料数	推定年代
第1次窯	5° 14'	43° 43'	± 8° 08'	15	5世紀前半 ～中頃
第2次窯	-6° 41'	40° 34'	± 2° 21'	22	5世紀後半
第3次窯	-14° 59'	56° 25'	± 1° 25'	30	6世紀中頃又 は7世紀中頃
現在在	-6° 23'	48° 09'			

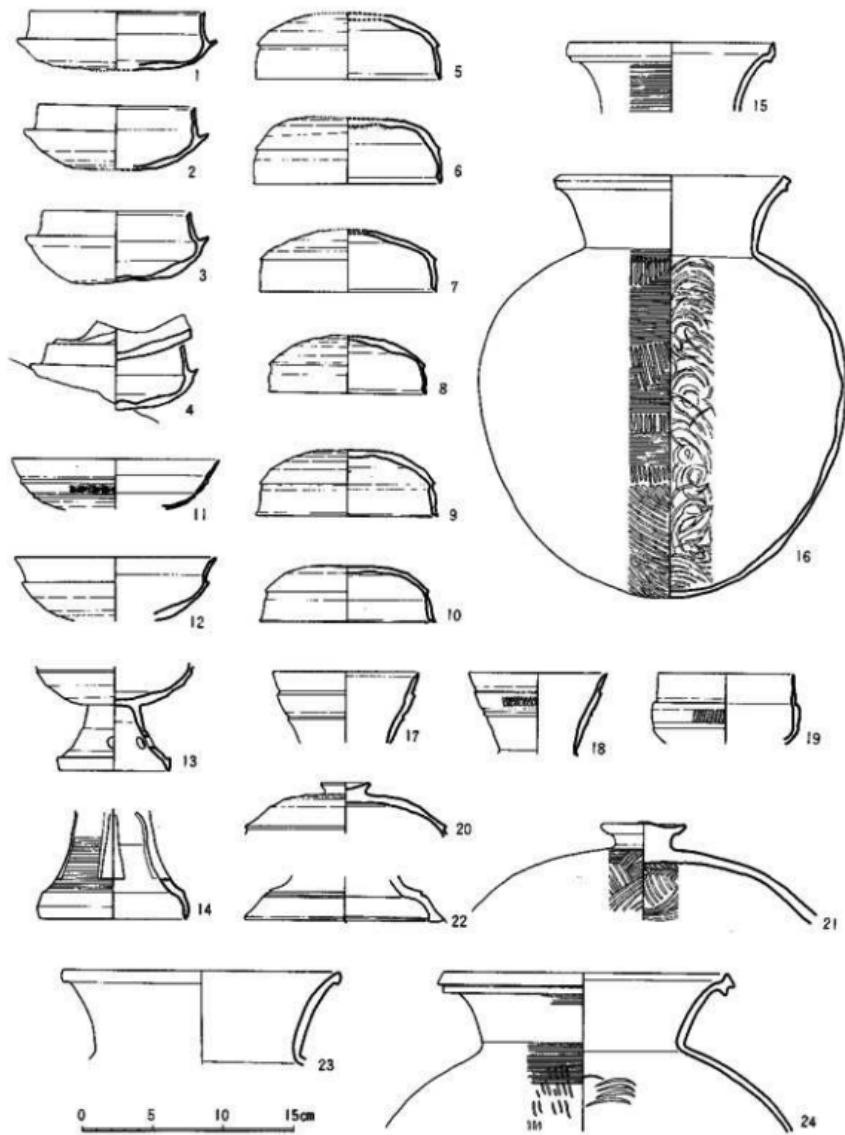
この結果については、現在の考古学の成果との間にかなりの誤差がある。今後これらの資料の増加により、科学的により正確な年代測定が可能になるよう共同研究を進めていかねばならない。

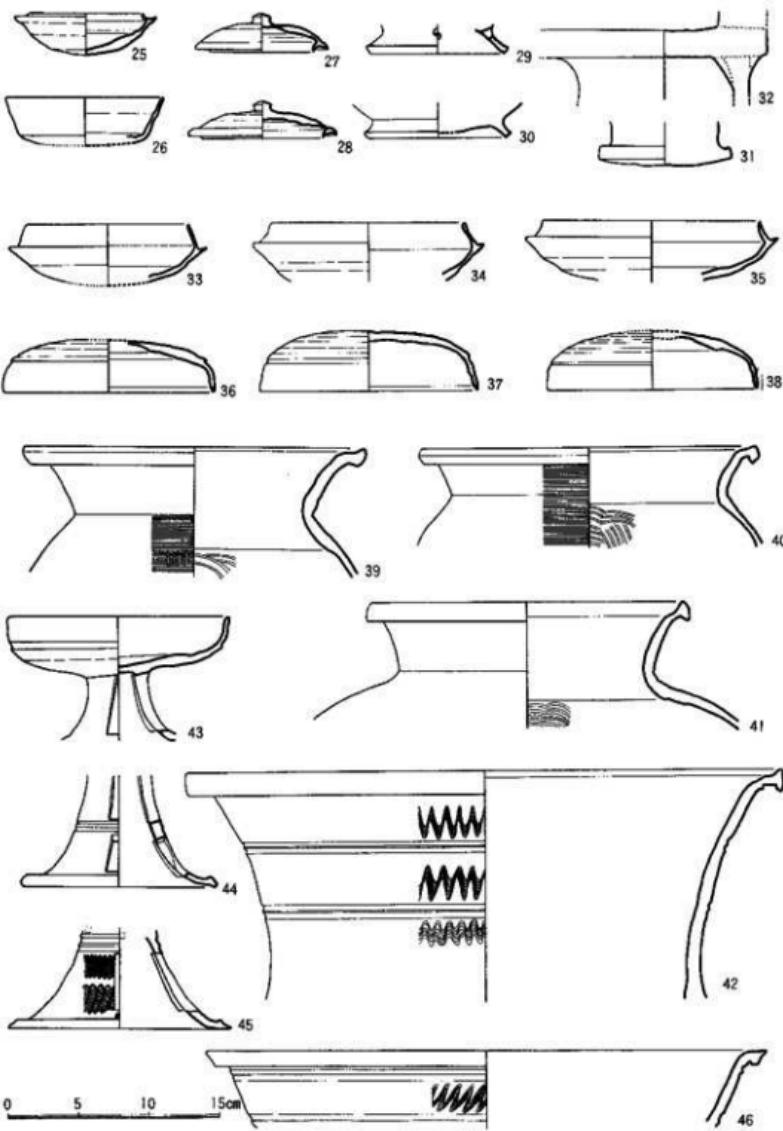
- 注 (1) 藤澤一夫氏『豊中市史』第1巻 昭和36年 豊中市史編纂委員会  
(2) 「S T-37号窯跡発掘調査概報」昭和43年 府立茨木高校歴史研究部  
『吹田市文化財分布図』昭和49年 吹田市教育委員会  
(3) 田辺昭二・横山浩一氏『陶器山周辺地域窯跡調査概報』昭和39年 大阪府教育委員会  
(4) 田辺昭三氏『陶邑古窯址群』昭和41年、平安学園考古学クラブ  
(5) 藤沢一夫・小林行雄氏「埴輪と祝祭の窯跡」昭和9年 『考古学』第5巻、第10号  
東京考古学会



圖版一 連續測量圖

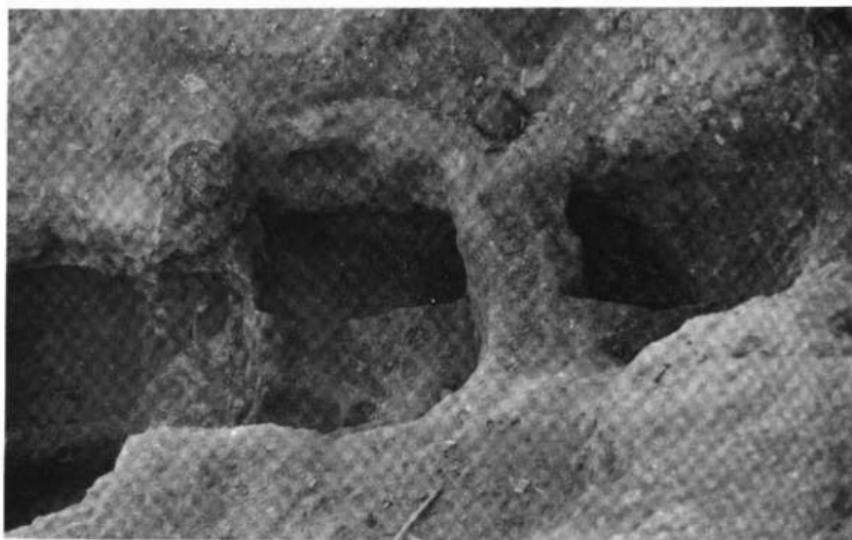
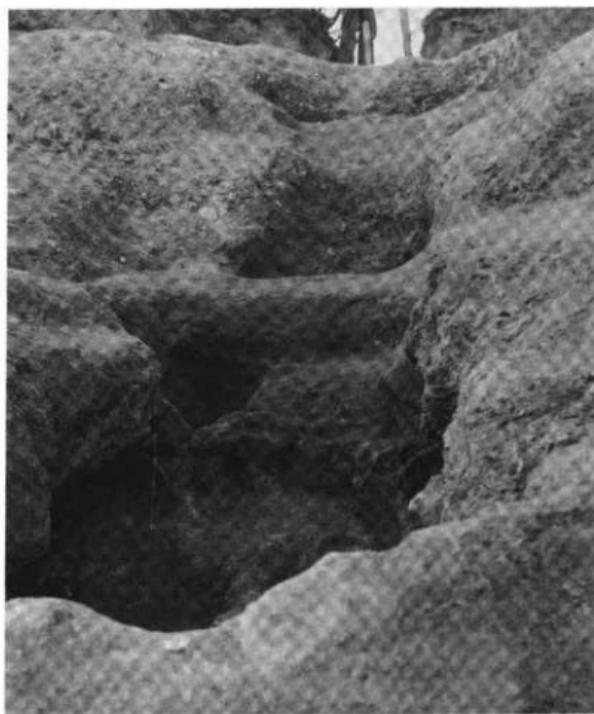


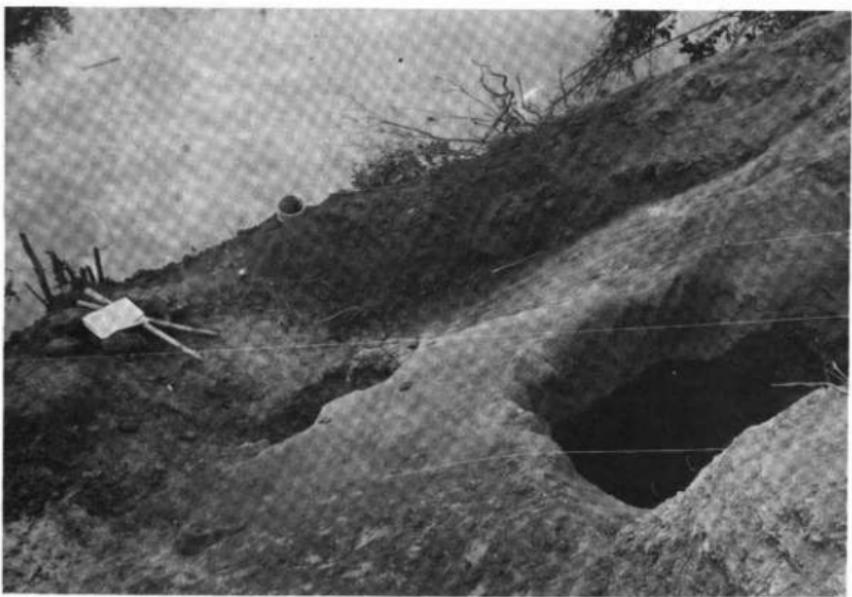


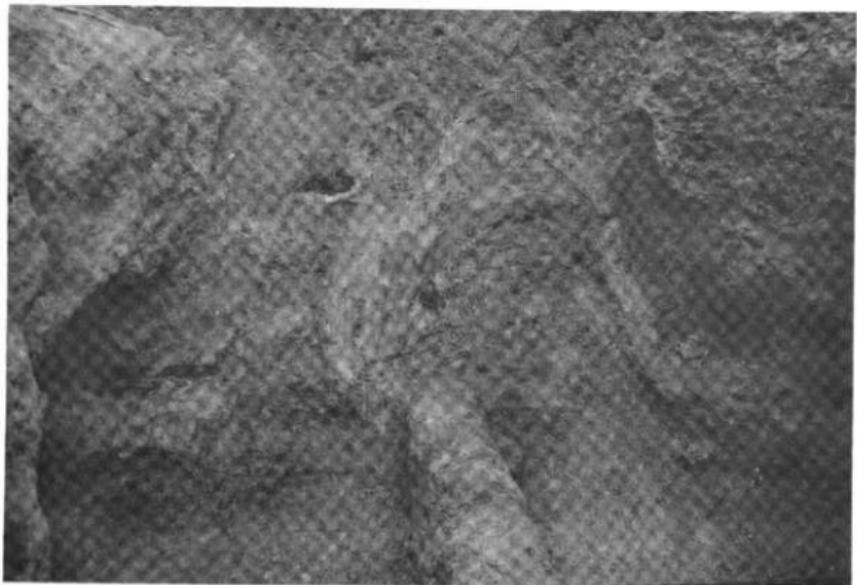


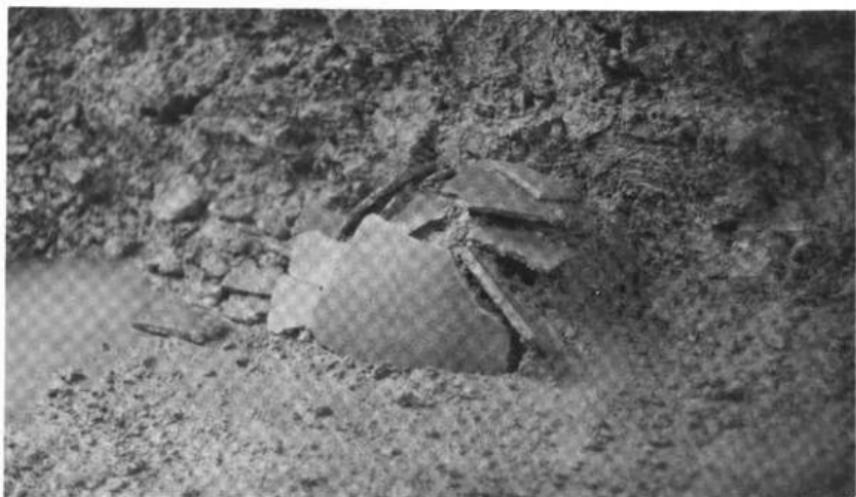


図版5 犀壁の状態









図版9 発見時の状態(上) 工事着工前の状態(下)

